The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞キケロー『弁論家』（3）
Author(s)	渡辺，浩司
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要．2024，1，p．257-275
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94807
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

キケロー『弁論家』(3)

渡 辺　浩 司　訳

凡例

1　キケロー『弁論家』(全 238 節) の 50 節から 74 節までの翻訳である。49 節までの翻訳は、『大阪大学大学院文学研究科紀要』62（2022）pp. 97-125 と同 63（2023）pp. 97-114 に掲載されている。

2　底本は以下である。
Westman, R., *M. Tullius Cicero scripta quae manserunt omnia*, Fasc. 5 *Orator*, Leipzig, 1980.

3　ローマ数字は Janus Gruter 版キケロー全集（1618 年）の区分を示す。アラビア数字は Alexander Scot 版キケロー全集（1588-1589 年）の区別を示す。引用などでは前者を章、後者を節とする。

4　固有名詞について、ギリシア人名の場合はギリシア語形、ローマ人名の場合はラテン語形で表記する。ph、th、ch の音は、それぞれ p、t、k と同じ音とした。

5　本文中で用いた記号については、［　］は底本が不要とする箇所を示す。ダッシュは底本のダッシュないし括弧である。（　）は底本に記されたギリシア語とラテン語を、〔　〕は訳者の補訳を記す。底本に従わないときは注に記す。

6　章、節とは別に全体をいくつかの部分に区分けし、各部分の冒頭に見出しを付した。

7　注は、「キケロー『弁論家』（１）」渡辺浩司訳（『大阪大学大学院文学研究科紀要』62（2022）、pp. 97-125）からの通し番号である。

8　文献は「キケロー『弁論家』（１）」渡辺浩司訳（『大阪大学大学院文学研究科紀要』62（2022）、pp. 97-125）と同じである。追加すべき文献があるときはその都度注に記す。

弁論家の仕事：配列

50　さて次に、弁論家は自分が発想したものを何という注意深さで配列することでしょう。配列が三つのうちの第二番目だからです[127]。当然のことながら弁論家は立派な前庭を作り、自分の弁論へと至る輝く通路を作ることでしょう[128]。最初の前置きで人々の心をとらえたなら[129]、弁論家は自分の主張を確かなものにし、反対意見を反駁し、排除することになります[130]。最も確実なものは、最初と最後に置き、不確かなものは中間に挟むことになるでしょう[131]。

弁論家の仕事：措辞と口演

弁論の最初の二つの部分〔発想と配列〕にどのようなものがあるのかを、私は要約して簡潔に記述しました。**XVI**　**51**　しかし、先にも言われたように[132]、これらの部分には重くて大きいものがありますが、技術や労苦にあまり関係しません。さて、何を語るべきか、どの順番に語るべきかを発想した後で、次に来るのはきわめて重要なこと、すなわち、どのように語るべきかを見ることです。この金言は、私たちのカルネアデース[133]がしばしば言っていたことです。またクレイトマクス[134]も同じように言っていましたし、カルマダース[135]も同じやり方で言っていました。そしてもし、哲学の分野で、どのように語るのかがこれほど重要なのであれば、訴訟においてもどれほど重要かを考えてみなければなりません。話し方が訴訟全体の行方を左右するのですから。**52**　ブルートゥスよ、君の手紙から推察するに[136]、発想と配列において私が望む最高の弁論家とはどのようなものなのかについて君が質問しているのではなく、話し方そのものの最高の型はどのようなものだと私が考えているのかを君が知りたがっているように思われました。難しい仕事です、神々よ、すべての物事の中でも最も難しい。というのも、言葉は柔らかくしなやかでとても柔軟なので[137]君が向かいたい方へついて来るだけでなく、性格と意図の多様さが、互いに大いに異なる弁論の種類を生むからです[138]。**53**　すばやい話し方を雄弁とみなす人たちには、言葉の流れと流暢さが好まれます。はっきりと区切られた中断[139]や息を継ぐための間を喜ぶ人たちもいます。これら〔二つ〕ほどに異なるものが何かあるでしょうか。しかしながら、どちらの話し方にも卓越したものがあります。ある人たちは、平穏さと単調さのために、いわゆる純粋で明晰な弁論の種類のために努力します[140]。さてここで、言葉の堅固さと厳格さを、そしていわば暗く沈んだ話し方を求める人たちのご登場です[141]。少し前に私が指摘した区別に従うと[142]、ある人たちは荘重であると思われることを望み、ある人たちは簡素であると思われることを望み、また、ある人たちは中間であると思われることを望むということになります

が、弁論家の種類は、私が述べた弁論の種類と同じ数だけ見い出されるのです。

54 さて、私はこの贈り物を、君が求める以上に拡大し始めたので、――すなわち、君は話し方の種類についてだけ尋ねてきたのですが、私は発想と配列についても簡潔にですが答えました――今は、話し方の方法だけでなく口演の方法についても話すことにしましょう[143]。したがってあらゆる部分が省略されることなくすむでしょう。記憶についてはここで語るべきことが何もないからです。記憶は、多くの技術に共通しているからです[144]。

55 さて、どのように語るのかは、二つの点からなります。すなわち口演と措辞です。口演は、声と動作から構成されていて、いわば身体の雄弁とも言うべきものだからです[145]。声の調子の変化は心の変化と同じくらいさまざまなものがあります。心はとくに声によって動かされるからです[146]。したがって、先ほどから私の議論が示してきた完璧な弁論家は、自分自身も感動しているように見せることを望み、聴衆の心を動かすことを望み、その望みに合わせて特定の声の調子を採用するのです[147]。もし仮に今が教えるべきときだったら、あるいはもし仮に君が望んでいたならば、この点についてもう少し詳しく説明したかもしれません[148]。顔の表情と結びついている身振りについても説明したかもしれません[149]。これらすべてを弁論家がどう使うかによってどれほどの違いが生まれるのかはほとんど説明することができません。**56** というのも、子供のようにうまく話せない人たちでさえも、口演に威厳があれば、措辞も優れているという評判を得てきたのですから。巧みに話す人たちでも、口演の形が壊れていたら、多くの人によって子供だとみなされてきたのです。したがって、デーモステネースが口演に一等も二等も三等も与えたのは故なきことでありません[150]。口演がなければ措辞もないとしても、措辞がなくても口演は重要なのであって、確かに口演は弁論の中で最も大きな役割を果たしているのです。したがって、雄弁の最上位を目指すあの人は、緊張した声で激しく話したり[151]、抑えた声で穏やかに話したり[152]することを、そして低い声で重厚に見えるようにしたり[153]、震える声で哀れに見えるようにしたり[154]することを望むでしょう。**57** 声の性質は驚くべきものです。声は全部で三つの音調からできています。すなわち、曲がった、鋭い、重いの三つです。これら三つから、あれほど多くの、あれほど甘美な多様性が、歌の中に生み出されるのです。**XVII** さらに、弁論の中にも、はっきりとはしていませんがある種の歌のようなものがあります。これは、プリュギアやカーリア出身の[155]弁論家たちによる、ほとんど喜劇の独唱[156]のような弁論の締めくくり[157]ではありません。そうではなくて、デーモステネースとアイスキネースが互いに互いの声の抑揚を非難したときに彼らが意味していたものです[158]。〈***〉すなわち、デーモステネースはさらに言葉を続け、彼を甘く澄んだ声の持ち主だったとしばしば言っています。**58** ここで、声の甘美さを熱心に追求するさいに注意すべき点があります。すなわち、自然そのものが、あたかも人間たちの弁論を調整するように[159]、すべての単語に鋭い調子を一つだけ置いた

のです。しかも単語の最後の音節から三つ以上遡ることがありません。したがって、耳への快楽への自然の導きに勤勉に従うべきなのです。**59**　確かに優れた声を望むべきですが、しかしそれは私たちの力ではどうにもできないものなのです。私たちにできるのは声を操作し利用することなのです。したがってあの最も優れた弁論家は、自分の声をさまざまに変化させることでしょう[160)]。あるときは声を緊張させ、あるときは声を解放し、音調のすべての領域を利用することでしょう[161)]。

彼はまた、過度になりすぎない程度に身体の動きを利用することでしょう。直立して、体勢を維持します。まれに、立っている場所からあまり遠くない所へ動くこともあるでしょう。また適度に聴衆の方に進み出ることもしますが、これもまれなことです。首を垂れることも、指を忙しげに動かすことも[162)]、指で拍子を取ることもありません。身体全体で自らの動きを制御し、上半身を男らしくして、昂ると手を伸ばし、落ち着くと手を下げるのです[163)]。

60　表情は、声の次に重要な力を持ちます。それは、あるときはどれほどの威厳を、あるときはどれほどの優雅さを生みだすことでしょうか。表情が不適切なものや過度なものにならないようにしたら、次に目の動きを制御しなければなりません[164)]。というのも、表情は心の映し絵だとすれば、目は心の指標だからです[165)]。目下の議論にしたがって、喜びと悲しみを交互に表す目の動きも規制されることになります[166)]。

弁論家の話し方と哲学者、ソピスト、歴史家の話し方との違い

XIX　61　しかし、あの完全な弁論家の姿、最高の雄弁の姿を描く仕事に戻らなければなりません。言葉それ自体が示しているように、完全な弁論家は雄弁というこの一点において卓越していて、他の技術はこの雄弁の中に隠れているのです。というのも、これらの技術すべてを包含する言葉は、「発想者（inventor）」でもなく「配列者（compositor）」でもなく「口演者（actor）」でもなく、「話すこと」に由来するギリシア語の「弁論家（ῥήτωρ）」であり、ラテン語で言うところの「雄弁な（eloquens）」なのです。弁論家の他の諸技術[167)]のうちのある一つを自分のものだと主張する人もいますが、話すことの、つまり雄弁の最大の力は弁論家にしか認められていないのです。

62　確かに哲学者たちの中には見事に装飾して語る人たちもいます[168)]——たとえば、テオプラストスは、神的な話し方ゆえに名づけられたのです[169)]。またアリストテレースはイソクラテースにさえ挑みました[170)]。またムーサの女神たちはクセノポーンの声で語ると言われています[171)]。さらにプラトーンは威厳と甘美の点で、書いたり話したりする人たちの中で最も優れていて傑出していました[172)]。——が、彼ら哲学者たちの弁論には、人前で話す雄弁に必要な活力も警句も見られないのです。**63**　彼らは、学者たちと話しているのであっ

て、学者たちの心を鼓舞するよりもむしろ落ちつかせることを好むのです。落ち着いていて混乱を引き起こさない主題について、人の心を惹きつけるためではなく、教えるために話しているのですから。話すことによってある種の喜びを得るという点で、彼らは必要以上のことを行なっているとある人たちには思われています[173]。したがって、哲学者たちの雄弁と、私たちが今ここで論じている雄弁とを区別することは難しいことではありません[174]。**64** 哲学者たちの弁論は穏やかで閑雅なものです。人々が気に入るような語句もなく、韻律に縛られることもなく、かなり自由です[175]。そこには怒りも妬みも残忍さも悲惨さも狡猾さもありません。それは、純潔で慎み深く穢されていない乙女なのです[176]。したがって、弁論(oratio)というよりもむしろ対話(sermo)と言われるべきものなのです[177]。話すことはすべて弁論なのですが、弁論というこの特別な名前が表わしているのは弁論家の話だけです。**65**

弁論家たちは、先に述べた[178]ソピストたちと類似しているので、さらに注意深く区別する必要があります。ソピストたちは、弁論家が訴訟弁論で用いる装飾と同じものを使おうと望みます。しかし相違点もあります。すなわち、彼らの目的は、聴衆の心を掻き立てることではなく宥めることであり、喜ばすことというよりも説得することなのです。そして彼らは、私たちよりもあからさまに、もっと頻繁にそうしているのです。彼らは、もっともらしい考えよりも整えられた考えを求め[179]、しばしば主題から脱線し、神話を挟み込み、あからさまに比喩[180]を用い、画家がさまざまな色を配列するように、言葉を配列し、等しい文を並置し[181]、対立するものを対置し、同じような音で終わる語句で何度も文を締めくくるのです[182]。**XX 66** この種の隣にあるのが歴史です。歴史では装飾的に物語が語られ、しばしば地域や戦争が記述されます。その間にさらに演説や激励が置かれています。しかし、ここで求められているのは、ゆるやかで流れるような話し方であって[183]、あの凝縮された力強い弁論ではありません。私たちが求めるあの雄弁は、この歴史の話し方からと同じように詩的なものからも区別されなければなりません。というのも、詩人たちもまた、自分たちが弁論家たちと何が違うのかを問題にしてきたからです。かつては、最大の違いは韻律と詩行によると思われていましたが[184]、今では弁論家たちの間にも韻律がふつうになってきました。**67**

耳の尺度に当てはまるものはなんであれ――確かにそれは弁論の欠点となります[185]――、たとえ詩行と関係なくても、韻律と呼ばれています。それはギリシア語でリュトモス(ῥυθμός)と言われているものです。そういうわけで、プラトーンとデーモクリトスの話し方は、韻文ではないけれど、より激く語り、言葉の最も輝かしい飾りを用いているので、何人かの人々には、短い詩行がなければ日常会話と異なるところがない喜劇詩人たちのもの[186]というよりもむしろ詩と見なされるべきだと思われていたのを私は知っています。しかしながら、詩人は詩行に縛られているとはいえ弁論の徳を追求するさいにはもっと信用されてもよいのですが、これ〔激しく語り最も輝かしい飾りを用いること〕が詩人の最も重要

な仕事というわけではありません。**68**　しかしながら、たとえある詩人たち[187]の声が荘重で飾られているとしても、単語を作ったり[188]単語を結びつけたり[189]する点で、詩人たちの声は、私たち〔弁論家〕の声よりも大きな自由を持っていて、さらに、†少なからざる人々が認めているように†[190]、彼らは意味よりも声に注意を払っていると私は考えています。詩人と弁論家の間に共通のものが一つしかないとしても――その一つとは言葉の正しい選択です[191]――、それだけで、詩人と弁論家の間にある他の違いを理解することはできません。しかし詩人と弁論家の間に違いがあることに疑う余地はありません。たとえこの点について議論があるとしても、この問題を追究することは、必ずしも目下の目的と関係するわけではありません。したがって、哲学者たちの雄弁から、ソピストたちの雄弁から、歴史家たちの雄弁から、詩人たちの雄弁から弁論家を区別したので、今や私たちは弁論家とはどうあるべきかを説明しなければいけません。

弁論家の義務：証明すること、楽しませること、感動させること

XXI　**69**　雄弁の人は――この人を、アントーニウスの助言にしたがって[192]私たちが探し求めているのです――、法廷においてまた政治案件について[193]、立証するために、喜ばせるために、心を動かすために話す人のことです[194]。立証することは必然性に、喜ばせることは甘美なことに、心を動かすことは勝利に関わります。実際、すべての中で最後のものが訴訟に勝つためには最も強力なものなのです。さて、弁論〔話し方〕の種類は、弁論家の義務と同じ数だけあります。すなわち、立証するときには平明な話し方が、喜ばせるときには中間の話し方が、心を動かすときには激しい話し方があります[195]。そして最後のものに弁論家のすべての力が集約されています[196]。**70**　さて、これら三つの部分からなる多様性をあやつり、いわば調合しなければならない人は、最大の判断力と最高の技能を必要とすることになるでしょう。というのも、その人は、個々の案件において必要となるものが何であるかを判断し、案件が要求する方法でその都度語ることができなければならないからです。

しかし、他のすべての事柄と同じように、雄弁の基礎は知恵にあります[197]。人生においてと同じように弁論においても、ふさわしいことを見抜くことよりも難しいものはありません。これをギリシア人たちは πρέπον〔ふさわしさ〕と呼んでいます。私たちはもちろん decorum〔ふさわしさ〕と呼んでいます。これは、大いにすばらしい指導の対象であって[198]、最も知るに値することなのです。というのも、このことを知らないから、実生活においてのみならず、とてもしばしば韻文と散文の両方においても[199]、間違いを犯すことになるからです。**71**　さらに、弁論家は、思想におけるのみならず言葉においても何がふさわしいのかに注目しなければいけません。というのも、すべての状況が、すべての地位が、す

べての権威が、さらには年齢や時間や場所や聴衆が、同じ種類の思想によってあるいは同じ種類の言葉によって取り扱われるべきではないからです[200]。人生と同じように弁論のそれぞれの部分で、何がふさわしいのかを考察しなければなりません。ふさわしさは、論じようとする事柄と、話し手および聞き手の人柄とに左右されるのです[201]。**72**　したがって、哲学者たちは、広く適用できるこの主題を義務論の中で取り扱うのが常です――正しさそのもの、つまり完全に一つであるものを論じるときではありません――が、文法学者たちは詩人たちを論じるときに、弁論家たちは弁論のそれぞれの種類と弁論の各部分とを論じるときに、この主題を取り扱います。雨水の問題について一人の審判者の前で話すとき[202]、壮麗な言葉と共通のトポスを用いるのは[203]、なんとも不適切なことです。あるいは、ローマ人の威厳について声を抑制して平明に話すのは[204]、なんとも不適切なことです。XXII　そのように話す人々は、種類全体〔の取り扱い方〕の点で間違っています。しかし、自分自身の性格にせよ、審判者たちの性格にせよ、敵対者たちの性格にせよ、性格を扱う時点で間違いを犯す人たちもいますし、さらに事実の陳述だけでなくしばしば言葉遣いにおいても間違いを犯す人たちもいます。事実がなければ言葉は何の力も持ちませんが、しかし同じ事実でも説明する言葉遣いによって是認されたり拒絶されたりするのです。**73**　あらゆる場合に気をつけなければならないのは「どの程度まで」ということです。というのも、あらゆるものには固有の限度があるにもかかわらず、〔限度を越えて〕「あまりにも大きすぎる」と、「あまりにも小さすぎる」よりもはるかに有害になるからです。この点に関してアペッレース[205]は、何が十分なのかが分からないとき画家たちでさえ間違いを犯すと言っていました。

ブルートゥスよ、君も気づいているように、これは重要な課題で、この課題だけで別に大部な著作を必要とすることでしょう。しかし目下の議論には以下のことで十分でしょう。「これがふさわしい」と私たちが言うとき――小さなことであれ大きなことであれすべての言動に対して私たちはこのように言うのですが――、もう一度言いましょう、「これがふさわしい」とか「あれはふさわしくない」とかと私たちが言うとき、ふさわしさがあらゆる場合に重要なのは明らかです。また「ふさわしい」と言うべきかそれとも「そうするべきだ」と言うべきかは別の問題で別の事柄なのです――**74**　というのも、「そうするべきだ」というのは、常にあらゆる人々によって実行されるべき義務の完全な姿を意味しているのに対して、「ふさわしい」というのは、適切だということ、状況や人物に適合しているということを意味しているのであって、それは言葉においてと同様に行為においても、つまり表情や身振りや歩き方においてもしばしば重要なものなのです――、「ふさわしい」に相反するのが「ふさわしくない」です。これを詩人は、最大の欠点として避けようとしますが、正直者の台詞を悪漢に語らせ、賢い人の台詞を愚か者に語らせて、間違いを犯すときもあります。またあの画家[206]は、イーピゲニーアの犠牲にさいしてカルカースが悲しみ、ウリクセースがもっと

悲しみ[207]、メネラーウスが悲嘆にくれているとき、アガメムノーンの悲嘆の大きさは絵筆で描くことができないので彼の頭を隠すべきだと考えていました。最後に役者でさえ何がふさわしいのかと自問しています。では、弁論家は何をすべきだと考えなければいけないのでしょうか。この点は重要なことなのですが、訴訟において、訴訟での役割において何をすべきかは弁論家に考えてもらいましょう。確かに明らかなことは、弁論の部分だけでなく訴訟全体においても、あるときにはある話し方が、別のときには別の話し方が用いられるべきなのです。

注

127）43 節を参照。そこでは発想（inventio）、配列（dispositio）、措辞（elocutio）の三つが挙げられている。注 116 を参照。

128）ここでは、弁論の序言が家屋の入り口に喩えられている。弁論術はしばしば建築術に喩えられる。『弁論家について』第 2 巻 320 節では、「しかし、家屋や神殿に対して前庭と通路が適切に調和しているように、弁論の最初に置かれる序言は、扱われる事柄の重要性に適切に調和していなければならない（sed oportet, ut aedibus ac templis vestibula et aditus, sic causis principia pro portione rerum praeponere.）」と言われている。前庭（vestibula）については『カエキーナ弁護』35 節で「もしお前の家の玄関や家屋だけでなく、通路や前庭に入ることさえも禁じられていたならば（si te … non modo limine tectoque aedium tuarum sed primo aditu vestibuloque prohibuerint.）」とある（*Cicero: Pro Lege Manilia, Pro Caecina, Pro Cluentio, Pro Rabirio Perduellioni*s, translated by H. G. Hodge, Loeb Classical Library, Cambridge, MA, 1927.）。デーメートリオス『文体論』13 節では「総合文の節は、丸天井をしっかりと支えて結合している石に似ているが、散漫な文体の節は、組み立てられず辺りに放置された石に似ている」と言われている（*Demetrius: On Style*, edited and translated by Doreen C. Innes based on W. Rhys Roberts, Loeb Classical Library, Cambridge, MA, 1995.）。さらに古くはピンダロス（前 518 年頃～前 438 年頃）が詩作を建築に喩えている。「私の住まいの、堅固な壁に囲まれた玄関に、黄金の柱をいくつか立てて、/ 立派な館を作る時のように、/ 私たちはしっかりと固定しよう。作品が作られ始めたら、/ その作品の正面は遠くまで輝くものにしなければならない」（ピンダロス「オリュンピア第 6 歌」1 行以下、*Pindar 1: Olympian Odes, Pythian Odes*, edited and translated by William H. Race, Loeb Classical Library, Cambridge, MA, 1997.）。またハリカルナッソスのディオニューシオス『文章構成法』第 22 章を参照。

129）「最初の前置き（prima aggressio）」は弁論の序言（exordium）のこと。序言については、『弁論家について』第 2 巻 315 節で「というのも、序言にあるのは、いわば第一印象であり、弁論の自己紹介であって、それは、たちまちのうちに、聴衆を魅了し、惹きつけるものでなければならない（prima est enim quasi cognitio et commendatio orationis in principio, quaeque continuo eum, qui audit,

permulcere atque allicere debet;)」とある。序言については、アリストテレース『弁論術』第３巻14章も参照。

130) 底本では「infirmabit excludetque contraria;(反対意見を反駁し、排除することになるだろう)」となっているが、「sua confirmabit infirmabit excludetque contraria;(自分の主張を確かなものにし、反対意見を反駁し、排除することになるだろう)」と読む。弁論は、序言(exordium)で始まり、その後に陳述(narratio)と立証(confirmatio)と反駁(infirmatio)と続き、結論(peroratio)で終わる。この箇所では陳述と立証が脱落している。したがって、テキストに何らかの脱落があると想定される。あるいは、キケローは直後に「要約して簡潔に説明した」と述べているので、この箇所での配列の説明は、陳述と立証を省略した簡潔な説明になっているのかもしれない。

131)『弁論家について』第２巻313節から314節では次のように言われている。「313　さて、配列という点において、確固としていないものを最初に配列する人たちを私は非難する。この点でまた、複数の弁護人を利用するとき――これはいいやり方だと私が思ったことは一度もない――、最も実力のないものに最初に語らせようとする人たちも間違っていると私は思う。というのも、聴衆の期待にできるだけ早く応えるのがこの場合に求められていることであって、最初に聴衆の期待が満たされていないならば、訴訟の後々の段階でもっと多くの苦労をしなければならなくなるからである。語り始めたらすぐに前よりもよくなっていると思われることがないような状況は、悪いのである。314　したがって、弁論家において弁論家の中でも最も優れた弁論家が最初に弁論するように、弁論においても最も確かなものが最初に置かれるべきなのである。もちろん、いずれにおいても、次の規則も同時に守らなければならない。すなわち、すべての中で最も有力な材料は弁論の最後にも残しておいて、中程の論点があれば――有害なものが入る余地は弁論のどこにもあってはいけない――弁論の中ほどに区別せずにまとめて配置するという規則である。(313 Atque etiam in illo reprehendo eos, qui, quae minime firma sunt, ea prima conlocant ; in quo illos quoque errare arbitror, qui, si quando—id quod mihi numquam placuit—pluris adhibent patronos, ut in quoque eorum minimum putant esse, ita eum primum volunt dicere : res enim hoc postulat, ut eorum exspectationi, qui audiunt, quam celerrime succurratur ; cui si initio satis factum non sit ; multo plus sit in reliqua causa laborandum ; male enim se res habet, quae non statim, ut dici coepta est, melior fieri videtur. 314 Ergo ut in oratore optimus quisque, sic in oratione firmissimum quodque sit primum ; dum illud tamen in utroque teneatur, ut ea, quae excellent, serventur etiam ad perorandum ; si quae erunt mediocria, nam vitiosis nusquam esse oportet locum, in mediam turbam atque in gregem coniciantur.)」また、『ヘレンニウスへ』第３巻18節、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第５巻第12章14節を参照。クインティリアーヌスは、弱い部隊を強い部隊で囲むというネストールの戦術を例に引いている。ホメーロス『イーリアス』第４歌299行以下を参照。

132）44 節。

133）カルネアデース（前 214 年頃〜前 129 年頃）はキュレーネー出身のギリシアの哲学者。新アカデーメイア学派の創始者。アカデーメイアで学ぶ。ヘゲシヌスの後を継いでアカデーメイアの学頭となる。前 155 年に、ストア派のディオゲネースとペリパトス派のクリトラーオスとともにアテーナイの使節としてローマに来る。この使節団については『弁論家について』第２巻 155 節、『トゥスクルム荘対談集』第４巻５節を参照。キケローは、カルネアデースを様々な著作で紹介している。この箇所で「私たちの」と言われているように、キケローとブルートゥスはアカデーメイア派の信奉者であった。『ブルートゥス』120 節、149 節を参照。

134）クレイトマクス（クリートマコス）は、カルネアデースの弟子。前２世紀から前１世紀に活躍した新アカデーメイア派の哲学者。『弁論家について』第１巻 45 節、『トゥスクルム荘対談集』第３巻５4 節、『アカデーミカ』第２巻 16 節を参照。

135）カルマダースは、カルタゴ出身、カルネアデースの弟子で、前２世紀から前１世紀に活躍した新アカデーメイア派の哲学者。『弁論家について』第１巻 45 節、84 節、第２巻 360 節、『アカデーミカ』第２巻 16 節を参照。

136）ブルートゥスからの手紙については１節を参照。

137）『弁論家について』第３巻 176 節では「言葉ほど柔らかく柔軟性に富むものはないので、君が導くところならどこであれ言葉ほど簡単についてくるものはない（nihil est enim tam tenerum neque flexibile neque quod tam facile sequatur quocumque ducas quam oratio.）」と言われている。また『ブルートゥス』274 節において、マルクス・カリディウスの話し方について論評している中でも同様のことが語られている。

138）『弁論家について』第３巻 25 節から 36 節、『ブルートゥス』83 節を参照。

139）223 節を参照。言葉の流れがコンマ（κόμμα）やコーロン（κῶλον）に分割されること。

140）「純粋で明晰な弁論の種類（puro quasi quodam et candido genere dicendi）」の「純粋な（purus）」と「明晰な（candidus）」はローマ市民が平時に着用した服であるトガを形容する言葉である。まず「純粋な」については『弁論家について』第３巻 29 節には、「それ〔カトゥルスの弁論〕は、ほとんど彼だけが正しいラテン語を話すと思われるほどに、混じりけのないものである（quae [=oratio Catuli] est pura sic,ut Latine loqui paene solus videatur）」とある。また『ブルートゥス』261 節には、「しかしカエサルは、理論を用いて、欠陥のある壊れた語法を、純粋で壊れていない語法によって改善する（Caesar autem rationem adhibens consuetudinem vitiosam et corruptam pura et incorrupta consuetudine emendat.）」とある。同 262 節には、「というのも、歴史には、純粋で明瞭な簡潔さ以外に甘いものは何もないからである（nihil est enim in historia pura et inlustri brevitate dulcius.）」とある。同 274 節には「彼の言葉は、これ以上透明なものなどないほどに純粋である（quae...ita pura erat ut nihil liquidius）」とある。クインティリアーヌス『弁論家の教育』

第11巻第1章53節を参照。「明晰な」については、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第10巻第1章73節、113節、121節を参照。

141) 喜劇において人物が登場するときの皮肉めいた表現が用いられている。30節と注70を参照。「暗く沈んだ話し方(orationis maestitiam)」は、「威厳(majestatem)」とほぼ同じ意味だと推測される。20節を参照。

142) 20節と21節を参照。

143) 発想については43節から49節、配列については50節を参照。発想、配列、措辞、記憶、口演の5つの部分のうち2つが論じられたことになる。口演は51節から60節で論じられる。記憶は弁論術だけでなく他の多くの技術にも関係するので省略されている。措辞は61節から最後までで論じられる。なお措辞はいわゆる修辞というものではなく、弁論ないし言論の音声面のことである。文体という訳語だと、書かれた文書が念頭に置かれるきらいがあるので、文体という訳語はできる限り避けた。

144)『弁論家について』第2巻86章350節から360節において記憶術が概説されている。また『ヘレンニウスへ』第3巻28節から40節、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第11巻第2章1節から15節を参照。

145)『弁論家について』第3巻222節で「というのも口演は、いわば身体の語りかけであり、それだけにいっそう精神の動きに一致していなければならないからである(est enim actio quasi sermo corporis, quo magis menti congruens esse debet)」と言われている。クインテリアーヌス『弁論家の教育』第11巻第3章1節を参照。

146)『弁論家について』第1巻18節では「それ〔口演〕は、身体の動き、手足の振り、顔の表情、声の抑揚によってさまざまに操作されなければならない(quae(= action)motu corporis, quae gestu, quae voltu, quae vocis conformatione ac varietate moderanda est)」と言われている。ハリカルナッソスのディオニューシウス『デモステネス論』第53章では口演が声の動きと身体の動きに二分されている。

147)『弁論家について』第3巻216節では「心の動き〔感情〕はすべて、それ自身の表情と声と身振りを生まれながら持っている。人間の身体全体、人間のすべての表情、すべての声は、あたかも竪琴の弦のように、心の動きによって打たれるのに応じて鳴り響く(Omnis enim motus animi suum quendam a natura habet vultum et sonum et gestum ; corpusque totum hominis et eius omnis vultus omnesque voces, ut nervi in fidibus, ita sonant, ut a motu animi quoque sunt pulsae.)」と言われている。

130節と132節では、弁論家と聴衆の間に真なる共感があるとする。弁論家が怒りを感じているように見えないならば聴衆の心に怒りの感情を喚起することはできないという考えについては、『弁論家について』第2巻189節から196節を参照。弁論そのものが弁論家の心を動かすという考えに

ついては同書同巻 191 節を参照。弁論家は怒るべきではないという考えについては『トゥスクルム荘対談集』第 4 巻 55 節を参照。

148) 感情と声の関係については『弁論家について』第 3 巻 216 節から 219 節を参照。

149) 感情と表情及び身振りについては『弁論家について』第 3 巻 220 節から 222 節を参照。

150) デーモステネースの言葉は、『弁論家について』第 3 巻 213 節、『ブルートゥス』142 節でも紹介されている。

151)『弁論家について』第 3 巻 219 節、同書第 2 巻 200 節を参照。

152) 26 節と 72 節を参照。また『弁論家について』第 3 巻 219 節を参照。

153) 27 節を参照。『ブルートゥス』158 節ではクラッススがこのような話し方の対極にあるとされている。

154)『弁論家について』第 2 巻 193 節を参照。

155) プリュギアについては、25 節と 27 節を参照。カーリアについては 25 節を参照。

156)「喜劇の独唱（canticum）」は、ローマ喜劇における伴奏つき独唱歌の部分のこと。これに対立するのが「対話の部分（diverbium）」である。弁論にも歌のようなものがあるという指摘については、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 1 巻第 8 章 1 節から 2 節、第 11 巻第 3 章 13 節、同 58 節と 60 節と 167 節を参照。

157)「締めくくり（epilogus）」は、「結び（peroratio）」と同じ意味であるが、とくにアジア風の弁論家たちが弁論の結びで声を張り上げて歌うように弁論を締めくくることを意味する。8 節と 27 節を参照。なお 27 節の当該箇所を「実際、もし彼らが高い声で叫びながらアッティカ風に歌い始めたら」と訳したが、「実際、もし彼らが低い声で叫びながらアジア風に歌い始めたら」に訂正する。

158) デーモステネース『冠について』251 節と 280 節と 291 節を参照。またアイスキネース『クレシポン弾劾』209 節から 210 節を参照。

159) 173 節と 177 節を参照。『弁論家について』第 3 巻 185 節に「自然そのものが聴衆の耳の要求を満たすように声の調子を変える（hominum auribus vocem natura modulatur ipsa）」と言われている。

160)『弁論家について』第 3 巻 225 節を参照。

161)『弁論家について』第 3 巻 227 節を参照。

162)『弁論家について』第 3 巻 220 節を参照。注 146 を見よ。

163)『弁論家について』第 3 巻 220 節では、「さて、こうした感情のすべてには動作が伴っていなければならない。それは、言葉を再現する芝居の動作ではなく、事柄全体と考えを、提示するのではなく暗示することで明らかにする動作であって、舞台や役者から借りてきたものではなく、武器や教練場から借りてきた力強くて男らしい身体の動きである。しかし手の動きはそれほど忙しいものではなく、指の動きが言葉の後についていくようにして、言葉を表すようにしてはいけない。腕は、弁論のいわば槍とも言うべきものであって、槍のようにときには少し高く前に出さないといけない。力を入れたいところの始めや終わりで、足を踏み鳴らすべきである。（Omnis autem hos motus

subsequi debet gestus, non hic verba exprimens scaenicus, sed universam rem et sententiam non demonstratione, sed significatione declarans, laterum inflexione hac forti ac virili, non ab scaena et histrionibus, se ab armis aut etiam a palaestra; manus autem minus arguta, digitis subsequens verba, non exprimens; bracchium procerius proiectum quasi quoddam telum orationis; supplosio pedis in contentionibus aut incipiendis aut finiendis.)」と言われている。

164)『弁論家について』第3巻222節では、「したがって目の動きには最大の制御が必要である(Qua re oculorum est magna moderatio;)」と言われている。

165)『弁論家について』第3巻221節では「しかし顔の表情にすべてがある。その中でもすべてを決定しているのは目である…口演とは心のすべてであり、表情は心の映し絵であり、目は心の指標である。目は、心が動くその様[と変化]をそのままに示すことができる唯一の身体の部分である。(Sed in ore sunt omnia, in eo autem ipso dominates est omnis oculorum; . . . animi est enim omnis action et imago animi vultus, indices oculi : nam haec est una pars corporis, quae, quot animi motus sunt, tot significations [et commutations] possit efficere ;)」と言われている。

166) 目の動きについては『弁論家について』第3巻222節を参照。

167)「弁論家の他の諸技術」とは法律、哲学、歴史のこと。115節から120節を参照。また『弁論家について』第2巻38節を参照。同書第1巻49節では、哲学者たちの言論も弁論の法理に属するとされている。

168) 62節から哲学者が論じられ、ソピストが65節で、歴史家が66節で取り上げられる。

169) テオプラストスは神のように(テオス)話す(プラクソー)という意味。アリストテレースが命名した。ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第5巻38節を参照。

170) 哲学者アリストテレースは、弁論家イソクラテースに弁論で挑んだ。『弁論家について』第3巻141節、『トゥスクルム荘対談集』第1巻7節、『義務について』第1巻4節を参照。キケローはアリストテレースの文章を豊かで美しいと評している。『発想論』第2巻6節、『トピカ』3節を参照。キケローは、イソクラテースが初めて散文中に韻律を使ったとみなしている。174節を参照。

171) クインティリアーヌスがこの言葉を引用している。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第10巻第1章33節を参照。クセノポーンについては32節、『弁論家について』第2巻58節、『ブルートゥス』132節を参照。『ブルートゥス』112節では彼の『キュロスの教育』が広く読まれていることが報告されている。

172)『弁論家について』第1巻47節を参照。またクインティリアーヌス『弁論家の教育』第10巻第1章81節を参照。

173) ストア派は、雄弁の甘美さを重視しない。

174) 哲学者の雄弁と弁論家の雄弁の違いが、聴衆と主題と目的の違いによって説明されている。哲学者が語るときは「loquor(話す)」が、弁論家が話すときは「dico(話す)」が遣われている。

175）40 節と 77 節を参照。また『弁論家について』第３巻 175 節、184 節を参照。

176）『ブルートゥス』330 節では雄弁が女性に例えられている。

177）151 節でも「対話（sermo）」がプラトーンの著作を表す語として用いられている。

178）37 節を参照。37 節から 42 節までで演示的弁論が論じられている。

179）「整えられた（concinnus）」については 38 節を参照。

180）「もっとあからさまに比喩を用いる（verba apertius transferunt）」を「無理な比喩を用いる（verba altius transferunt）」とする校訂がある。

181）38 節と注 102 を参照。

182）175 節を参照。

183）『弁論家について』第２巻 54 節では「カトゥルスは言った、「君の言う通りだが、あのカエリウスでさえも歴史を多様な色で飾ることもなく、言葉の配列によっても話し方の緩やかで均整のある流れによっても、あの作品を磨くこともなかった。」（‘Est,’ inquit Catulus ‘ut dicis; sed iste ipse Caelius neque distinxit historiam varietate colorum neque verborum conlocatione et tractu orationis leni et aequabili perpolivit illud opus;’）」と言われている。

184）『弁論家について』第１巻 70 節を参照。アリストテレースは、弁論の語り方と詩の語り方は別であると言っている。『弁論術』第３巻第１章（1404a28）を参照。

185）『弁論家について』第３巻 175 節では「もし言葉の組み合わせによって弁論の中に詩行が生まれるならば、それは悪いことである（versus in oratione si efficitur coniunctione verborum, vitium est）」と言われている。

186）喜劇と詩の違いについては、ホラーティウス『風刺詩』第１巻第４歌 45 行以下を参照。

187）喜劇詩人に対立するものとしての悲劇詩人、叙事詩人、抒情詩人のこと。

188）「単語を作ったりすること（faciendorum verborum）」は、新しい語を作ること。80 節と 176 節、『弁論術の分析』74 節を参照。

189）「単語を結びつけたりすること（iungendorum verborum）」は、合成語を作ること。159 節を参照。『弁論家について』第３巻 154 節、同 170 節

190）底本（nonnullorum voluntati）通りに読む。このままでは意味がはっきりとしないので、さまざまな校訂が提案されている。「彼らのうちの少なからざる人々が快楽に［注意を払う］（nonnulli eorum voluptati（Madvig）et（add. D’Arbela））」という校訂が妥当と思われる。「少なからざる人々の（nonnullorum）」をテキストとしてこのまま認めると、「少なからざる人々の」が誰を意味しているのかが問題となる。『トゥスクルム荘対談集』第３巻 45 節を典拠にして、新しい詩人たちとみなす説もある。「認めることに（voluntati）」は「快楽に（voluptati）」と誤写される可能性は高い。ρ 写本では「voluptati」となっている。

191）「言葉の正しい選択（iudicium electioque verborum）」は、字義通りには「言葉の決定と選択」であ

る。Sandys (1885) は、iudicium を inventio と同じ意味だと解釈して、「主題の決定と言葉の選択」のことだと主張する。しかしながら inventio と electioto とは別物である。キケローはここで、詩人と弁論家の「共通なものが一つ」であると言っている。

192) 18 節を参照。

193)「法廷においてまた政治案件について (in foro causisque civilibus)」には、演示的弁論が含まれていない。この点については 37 節を参照。『弁論家について』第 1 巻 77 節では「法廷や政治に関わる事柄 (quod in forensibus rebus civilibusque versatur)」と言われている。同第 2 巻 42 節には「法廷及び市民たちの訴訟や論争に関わる問題 (quae in foro atque in civium causis disceptationibusque versantur)」と言われている。

194) 弁論の三つの目的について、『弁論家について』第 2 巻 115 節では「したがって、弁論の方法はすべて、説得の三つの手段に依存している。すなわち、われわれが弁護していることが真実であると立証すること、聴衆がわれわれに好意を持つようにすること、案件が要求するならばどんな感情へでも聴衆の心を導くことである。(Ita omnis ratio dicendi tribus ad persuadendum rebus est nixa: ut probemus vera esse, quae defendimus; ut conciliemus eos nobis, qui audiunt; ut animos eorum, ad quemcumque causa postulabit motum, vocemus.)」と言われている。同 121 節では「どのようなトポスを用いるならば、信頼を生み出すのに役立つあの三つの事柄に、すなわち聴衆の心に好印象を抱かせ、聴衆の心を教化し、聴衆の心を動かすということに弁論が導かれるのか (quibus ex locis ad eas tris res, quae ad fidem faciendam solae valent, ducatur oratio, ut et concilientur animi et doceantur et moveantur)」と言われている。さらに同 128 節と 129 節では「128 私の弁論すべての技術は、クラッススが今言葉をつくして天にまで持ち上げてくれた私の技能は、前にも言ったように、三つの事柄にかかっている。すなわち、一つは、聴衆に好意を抱かせること、もう一つは、教化すること、三つ目は、心を動かすことである。129 これら三つのうち第一のものは弁論の穏やかさを、第二のものは弁論の鋭さを、第三のものは弁論の力強さを要求する。(128 Meae totius rationis in dicendo et istius ipsius facultatis, quam modo Crassus in caelum verbis extulit, tres sunt res, ut ante dixi: una conciliandorum hominum, altera docendorum, tertia concitandorum. 129 Harum trium partium prima lenitatem orationis, secunda acumen, tertia vim desiderat ;)」と、同 310 節では「すでにしばしば述べてきたように、三つの事柄によって人々をわれわれの見解へと導こうとする、すなわち、教化することによって、あるいは好意を勝ち得ることによって、あるいは心を動かすことによって。(Et quoniam, quod saepe iam dixi, tribus rebus homines ad nostram sententiam perducimus, aut docendo aut conciliando aut permovendo,)」と言われている。『ブルートゥス』185 節では「私が考えていることだが、語ることによって効果を上げなければいけないことが三つある。すなわち、聞き手を教化すること、聞き手を楽しませること、聞き手を大いに感動させることである (Tria sunt enim, ut quidem ego sentio, quae sint efficienda dicendo: ut doceatur

is apud quem dicetur, ut delectetur, ut moveatur vehementius.)」と言われている。同 276 節も参照。『最も優れた種類の弁論家について』３節では「すなわち、最も優れた弁論家は、弁論によって聴衆の心を教化し、楽しませ、感動させる人である。(Optimus est enim orator, qui dicendo animos audientium et docet et delectat et permovet.)」と言われている。

アリストテレースは『弁論術』第１巻第２章（1356a1ff.）で、説得の三種類として「言葉（λόγος）による説得」、「話し手の性格（ἦθος）による説得」、「聞き手の感情（πάθος）による説得」を挙げている。またクインティリアーヌス『弁論家の教育』第３巻第５章２節を参照。

195) 20 節と 21 節を参照。前注にある『弁論家について』第２巻 129 節も参照。

196) 弁論家の義務と話し方の種類については75節から99節までで詳しく論じられる。『弁論家について』第２巻 215 節では「そこ〔聴衆の心を動かすこと〕にすべてはかかっている（in quo sunt omnia)」と言われている。同書第１巻 60 節、『ブルートゥス』276 節も参照。

197) ホラーティウス『詩論』309 行では「正しく書くことの起源と源泉は知恵にある（scribendi recte sapere est principium et fons)」(Klingner, F., *Q. Horatius Flaccus Opera*, Berlin, 2008）と言われている。またクインティリアーヌス『弁論家の教育』第 12 巻第２章６節を参照。

198)「ふさわしさ」の指導については、『義務について』第１巻 93 節から 99 節を参照。

199)「韻文と散文の両方において（in poematis et in oratione)」での「韻文における」ふさわしさについては『義務について』第１巻 97 節で「以上のことがこのように理解されているということは、詩人たちが追求するふさわしさということから推測することができる。ふさわしさについては、他の場所でより詳しく述べるのが常である。しかし、言葉や行動がそれぞれの登場人物の性格にふさわしいとき、私たちは、詩人たちがふさわしさを守っていると言うのである（Haec ita intellegi possumus existimare ex eo decoro, quod poetae sequuntur; de quo alio loco plura dici solent. Sed tum servare illud poetas, quod deceat, dicimus, cum id, quod quaque persona dignum est, et fit et dicitur.)」と述べられている（*Cicero: De Officiis*, translated by W. Miller, Loeb Classical Library, Cambridge, MA, 1913.)。また、ここでの「oratione」は弁論という意味ではなく、散文という意味で用いられている。166 節、174 節、178 節、198 節を参照。ラテン語にも「散文（prosa)」という言葉があるが、キケローは oratio と prosa を一緒に用いることはない。

200)『弁論家について』第３巻 210 節で「もっとも、すべての案件に、すべての聴衆に、すべての人物に、すべての時に適合する弁論が一種類しかないということがありえないのは明白である（Quamquam id quidem perspicuum est, non omni causae nec auditori neque personae neque tempori congruere orationis unum genus.)」と言われている。また同 211 節も参照。

201) 語り手と聞き手の性格に合わせた弁論の語り方については、アリストテレース『弁論術』第２巻第 13 章（1390a24-27)、同書第３巻第７章（1408a10-11）を参照。またリューシアースは、語り手の性格に合わせて弁論を作ったと言われている。ハリカルナッソスのディオニューシオス『リューシ

アース論』第 9 章を参照。

202) ここでの「雨水（stillicidium）」は建物の軒から落ちてくる雨のこと。「雨水・下水・汚水・煙の排出権（servitus stillicidii, cloacae, latrinae, fumi immitendi）」の訴訟が念頭に置かれている。この権利は「役権（servitutes）」の一つ。『弁論家について』第 1 巻 173 節で、雨水排出権は民事法廷である百人委員法廷（centumviri）で扱われていると言及されている。この箇所では「一人の審判者の前」となっているので、キケローは百人委員法廷ではなく、方式書訴訟手続という通常の民事訴訟手続による裁判を想定しているのだろう。雨水排出権については、ゲオルグ・クリンゲンベルグ（瀧澤栄治訳）『ローマ物件法講義』（大学教育出版社、2007 年）87 頁以下を参照。雨水の流失を差し止める権利もあった。「雨水阻止訴権（actio aquae pluviae arcendae）」についてクリンゲンベルグは、「低地に位置する土地の所有者は、高地に位置する土地の所有者を相手方として、後者が人工的工事 opus manu factum により雨水の自然の流れに変更をもたらしたとき、雨水阻止訴権 actio aquae pluviae arcendae により訴えることができる」（『ローマ物件法講義』41 ページ）と説明する。

203)「壮麗な言葉と共通のトポスを用いる」のは、壮麗な話し方〔文体〕の特徴である。102 節を参照。

204)「声を抑制し平明に話す」のは簡素な話し方〔文体〕の特徴である。20 節を参照。

205) アペッレースについては、５節ならびに注５を参照。

206) キュトヌス島出身のティーマンテースのこと。『ブルートゥス』70 節、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 2 巻第 13 章 12 節、プリーニウス『博物誌』第 35 巻 37 を参照。

207) 底本は maestior となっているが、tristior と読む。

訳者後記

キケロー『弁論家』（全 238 節）のうち 50 節から 74 節までの翻訳である。『弁論家』 1 節から 74 節までの概要は以下の通りである。

1 節－ 32 節　序文
　1 節－ 2 節　ブルートゥスへ
　3 節－ 6 節　理想的な弁論家の追究
　7 節－ 10 節　理想的な弁論家とは
　11 節－ 19 節　理想的な弁論家と哲学
　20 節－ 23 節　弁論の三つの種類、いわゆるアッティカ主義
　24 節－ 32 節　本当のアッティカ主義
33 節－ 238 節　本論
　33 節－ 35 節　ブルートゥスへの献辞
　36 節－ 42 節　快楽を目的とする弁論は対象としない
　43 節－ 49 節　弁論家の仕事：発想
　50 節　弁論家の仕事：配列
　51 節－ 60 節　弁論家の仕事：措辞と口演
　61 節－ 68 節　弁論家の話し方と哲学者、ソピスト、歴史家の話し方との違い
　69 節－ 74 節　弁論家の義務：証明すること、楽しませること、感動させること

弁論術は、発想、配列、措辞、記憶、口演の 5 つからなる。43 節から 60 節までで発想、配列、措辞と口演が論じられていて、53 節で記憶については省略するとされている。61 節から哲学者とソピストと歴史家の話し方と弁論家の話し方の違いが論じられる。69 節からは弁論家が果たす仕事として証明すること、楽しませること、感動させることの三つが挙げられる。

ここで論じられている措辞は、書かれた文章の修辞や構成というよりもむしろ弁論の音声面に重点が置かれている。それは、「どのように語るのか」ということは、措辞と口演からなると言われている（55 節）ことからも分かるように、具体的には、弁論家がどのような案件に対してどのような声の調子で話すのが良いのかということである。話し方には、荘重な話し方、平明な話し方、中間の話し方がある。これらは文体の三種類と見なすこともできると同時に、弁論家の種類とみなすこともできる。

Summary

Cicero's *Orator* (3)

Translated by Koji WATANABE

This is a translation of §50 to 74 of Cicero's *Orator* (238 in total).

Rhetoric consists of five parts: invention, arrangement, elocution, memory, and oral performance. From §43 to 60, the invention, arrangement, elocution and oral speech are discussed, though the memory is omitted because memory is not proper to rhetoric, but common to many arts. Starting from §61, the difference between the way philosophers, sophists, and historians speak, and the way orators speak is discussed. In 69 to 74, the three tasks of orators are listed: to prove, to entertain, and to impress.

The rhetoric discussed here focuses on the vocal aspects of the speech rather than on the rhetoric ornaments and structure of the written text. This can be seen from the fact that 'how to speak' is said to consist of exposition and oral speech (§55). 'How to speak' concerns what kind of tone of voice the orator should use when speaking about what kind of cases. There are three ways of speaking: solemn speaking, plain speaking, and intermediate speaking. These can be regarded as three types of styles, and at the same time they can also be regarded as three types of orators.